

# はり姫と。

No.14 2026年5月15日発行

県立はりま姫路総合医療センター  
地域連携だより [はり姫と。]

———地域の医療を、ともにより良くしていく存在として



腎臓病センター長  
腎臓内科 診療科長  
中西 昌平 Nakanishi Shohei

泌尿器科  
診療科長  
中野 雄造 Nakano Yuzo

緩和ケア内科  
診療科長  
坂下 明大 Sakashita Akihiro

小児科  
診療科長  
忍頂寺 毅史 Ninchoji Takeshi

腎臓病センター

発症から終末期まで切れ目なく診る

始まります。

腎臓内科

腎臓医療は、長期にわたる“リレー式医療”。  
透析・移植・緩和ケアといった複数の選択肢のなかで、  
患者さんにとって最適な医療をコーディネートします。



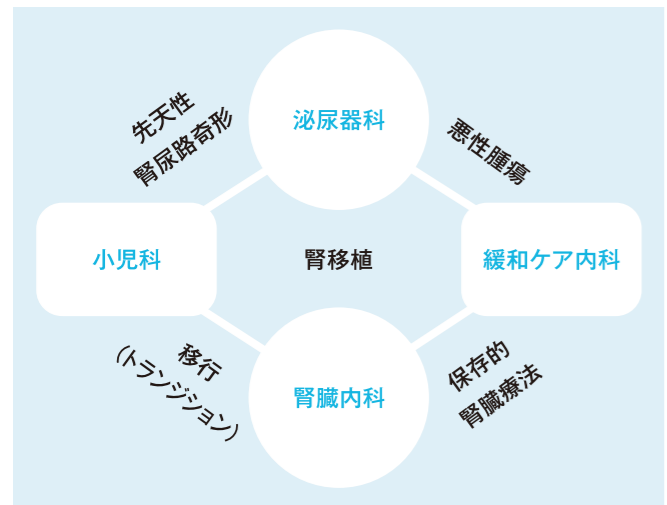
腎臓病センター長 腎臓内科診療科長  
中西 昌平

いまや日本人の5人に1人が慢性腎臓病といわれ、健康寿命だけでなく心臓や脳、さらにはがん治療にも影響する重要な疾患です。「はり姫」では開院以降、腎炎やネフローゼ、膠原病に伴う腎障害の診療から透析導入まで一貫して対応できる体制を整えてきました。2025年には99人が当院で透析を開始しており、血液透析は地域のクリニックへ、腹膜透析は院内でフォローしています。今後は地域全体で支える体制を広げていきたいと考えています。末期腎不全の治療には透析や移植など複数

の選択肢があり、腎療法選択外来で丁寧に説明しながら決定していただきます。一方で近年は、透析を行わない保存的腎臓療法を選ぶ患者さんも増え、終末期医療のあり方も変化しています。腎臓内科の役割の一つは、多様な選択肢の中から最適な医療をつなぐこと。小児期から成人期、そしてその先まで関わり続ける“リレー型医療”の中心として、地域と連携しながら体制を育てていきたいと考えています。当院は基盤づくりに注力し、将来的に、地域の腎疾患医療を支える存在を目指しています。

# 2026年4月開設。 腎臓病センターが 播磨姫路圏域の 腎臓医療の“空白”を埋めます。

小児から成人、血液透析・腹膜透析、腎臓移植、そして緩和ケアまで——  
播磨姫路圏域はこれまで、  
腎疾患に対して一貫した医療提供が難しい状況にありました。  
分断されがちだった腎臓医療をひとつの流れとしてつなぐ「腎臓病センター」が  
2026年度から「はり姫」でスタートしました。  
腎臓内科、泌尿器科、小児科、緩和ケア内科がそれぞれの専門性を持ち寄りながら  
患者さんの人生に寄り添い続ける腎臓医療に努めていきます。



泌尿器科

腎臓移植の院内体制は整いました。  
2026年度中に1例実施を目標に掲げ、将来的には月1件程度の実施も視野に入れていきます。



泌尿器科診療科長  
中野 雄造

兵庫県内で腎移植をおこなっている施設は限られており、実質的には神戸以東に集中しています。今般、「はり姫」で取り組む予定にしているのは、生体腎移植です。日本では移植の9割以上が生体で、ご家族からの提供が中心です。移植は透析と比べて余命の

改善が期待でき、就労や日常生活の自由度も大きく向上します。すでに院内体制や連携は整っており、症例を待っている状況です。まずはリスクの低い症例から慎重に始め、2026年度中に1例実施することを目標にしています。



泌尿器科  
西岡 遵

移植は、患者さんだけでなくご家族にとっても大きな意味を持つ医療です。近年は透析導入前に行う先行的腎移植(PEKT)が増えており、負担を軽減できる点からニーズも高まっています。「はり姫」では神戸大学の支援を受けながら、生体

腎移植に向けた体制を構築しました。術前・術後のフォローは、腎臓内科の先生方と連携してやっています。限られたマンパワーのなかで、周辺の管理を腎臓内科に支えていただくことで、私たち泌尿器科が手術に集中できる環境になっています。

小児科

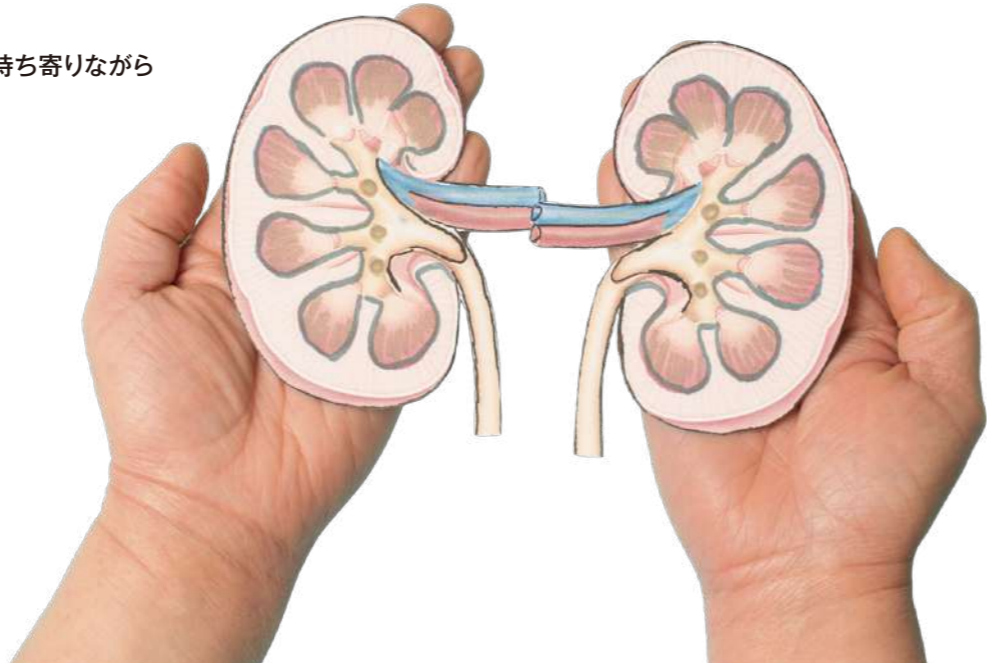
「はり姫」は小児科と腎臓内科の距離感が近く、  
小児腎臓診療から成人診療への移行も  
スムーズにおこなえる土壌が築かれています。



小児科  
上田 知佳  
小児科診療科長  
忍頂寺 毅史  
小児科  
青砥 悠哉

「はり姫」の小児科には腎臓専門医が3名在籍しており、小児科領域では珍しく、腎生検による病理診断や遺伝子診断から治療まで一貫しておこなう体制をとることができています。腎疾患で最も多いネフローゼ症候群(地域内でも年間2~3例発生しています)も、その経過は多様です。治癒しない場合は継続的なフォローが必要となりますが、「はり姫」ではさまざまな症例を経験しており、大学病院に紹介せずに地域で診療を完結できているケースも多いです。患者さんやご家族の通院負担の軽減にも貢献できています。

腎疾患は長く付き合う病気が多いため、成人診療への移行(トランジション)も重要です。「はり姫」では腎臓内科と連携し、高校生頃から並行して診ることで、成人期に自然に移行する流れをつくっています。専門病院では成人への移行が大きな課題となることも多いですが、院内で完結できる体制があることで、患者さんとご家族にとって心理的負担が少ない移行が可能となっています。中学生頃から服薬管理を本人に任せるよう促し、診察でも本人が主体的に話す機会を増やすなど、段階的に準備を進めています。



がん診療では診断時から緩和ケアを併行して提供することが重要です。2026年度からは腎不全や呼吸不全も、緩和ケアの対象疾患となります。「はり姫」の緩和ケアセンターは開院当初から、ご希望があれば疾患を問わず受け入れてきました。腎疾患についても、腎臓内科からの依頼で、透析継続が難しい方や強い倦怠感・痛みを抱える患者さんにチームとして関わってきた経験があります。今般、制度的な後押しが加わったことで、さらに関わりやすくなると思っています。腎臓病センター内の連携により、これまでより早い段階から関与できることも大きな変化です。一般病棟でのコンサルテーションに加え、必要に応じて緩和ケア病棟で専門的なケアを提供する流れもスムーズになるでしょう。一方で、在宅医療との連携はまだ十分とは言えません。たとえば、透析継続が困難となった患者さんの生活をどう支えるか——透析中止の意思決定支援や症状緩和は、緩和ケアに求められる大きな役割です。私たちは、患者さんが必要とするときに確実に受け入れる、受け皿として寄り添っていきたく考えています。

## 緩和ケア内科 診療報酬改定で、2026年度から 腎不全や呼吸不全も緩和ケアの対象に。



緩和ケア内科診療科長  
坂下 明大